

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレセント・ハート 三日月のクレハ

【Zコード】

Z7526Y

【作者名】

エメレンタールローヒ・スネオ

【あらすじ】

繋がりを断たれた世界、そして新たに放り込まれる世界。

その代償として何かを奪われてしまった。それが何かは分からない、だから何か。

胸に渦巻いている空虚さに首を傾げながらも、似て非なる世界決定的に何かが違う世界で生きていく。

誰かの手の平に踊られながらも

最初はどうでもいいと思っていた。

何もかもが退屈だつた。

その行為も特に意味はなく、単なる退屈しのぎに何とはなしに行つたというだけ。

単なる偶然、それを運命だと呼称すれば聞こえは良いかもしけないけれど……そんな表現をするのは何かが違うような感じがして……それはやっぱり偶然と表現するのが正しいと感じるものだつた。

その偶然が自分の中にある全てを教えてくれた気がした。

『どうでもいい』が『特別』になつていき、『退屈』が『楽しい』へと変わつてゆく。

その時間は、その一瞬だけは一緒に輝いているような……そんな気がして、一緒に居る時間がかけがえのない大切なもののようになつた。

だから、そのこの世界に自分という存在を繋げたいと、そつ思つた。

o-世界（後書き）

場面ごとに区切って投稿しようと迷っています。

それ故に短くなったり長くなったり、安定しない文量になってしまつそうです（汗

とりあえず、ここから一気に2話を連投しようと迷っています。
拙文ですが読んでくれたら幸いです。

1 旗折師（前書き）

今回から本文が開始、という感じです。
少し長めですが、読んで頂けたら幸いです。
それではどうぞ。

夕暮れの屋上。

日没寸前の太陽が辺りを赤く照らし、全てを朱色に染め上げていった。

屋上には誰も居ない、グラウンドの方から部活動に勤しむ声が淡々と聴こえてくるだけ。

(……この状況は、一体何なんだろう？)

そう思い、呆然とこの空間に一人だけ佇んでいる学生服を着た少年 篠崎ツバキは溜息を吐いた。

『話があるから屋上で待つて』

と帰るために支度をしている時に幼馴染から言われたので待つているのだが、その呼びだした張本人が一向に現れない。

もう既に待ち始めてから1時間以上が経とうとしていた。何の用があつて呼びだしたのか、そして呼びだしたくせに今どこで何をやっているのかは不明。

とはいえ長時間たつた1人だけで待たされて『いい加減、もう帰つてもいいんじゃなかろうか？』という思いが頭の中を巡り始めているというのが正直なところであった。

「……どうした、もんかなあ」

ハア、と溜息混じりに独り呟く。

流石にもう家へと帰りたいとそんな思いが頭を巡る、けれども呼ばれたのに勝手に帰るというのもそれはそれで何だかいけないようなことの気がして行動を起こすのは躊躇われた。

(……それに、このまま帰つたら……あいつ、怒りそうだしなあ)

呆然とフーンスに寄りかかりながら、今見上げていてる真っ赤な空の色と同じくらいに顔を真っ赤に染め上げて怒りを露わにする姿を想像する。

『あんた馬鹿じやないの！あたし、待つててつて言つたじやない！？何で待つてくれなかつたの！？』

とそんな風に怒鳴り散らしていく姿を想像する。

（……何で理不尽なんだ）

自分で想像しておいてツバキは頭を抱えた。

想像をした言葉の内容は『理不尽』としか表現できないものであつた、だが本当にそんな言葉を言つてするのが困つたところであつた。

それは幾度となく繰り返されたこと。

何故かは知らないが友人と折り合いが悪いことが奇跡的なまでに多く、毎日のよつに買い物へと付き合わされたり、遊びへと『仕方なく』誘われることが多々ある。

そして、家が隣同士だというのに何故か遠い場所で待ち合わせをする時はほほ遅れてやつてくるのがいつものパターンだつた。ちなみに『ほほ』という部分がまた困つたところで、遅れてくるからとたかをくくつて自分も遅れていくと予定通りの時間に居る句でいうこともあつたりする。

最初、いつまで経つても来なかつたので

『まあ、そういうこともあるか』

と自己完結をして帰宅したら烈火の『』とく怒られた。理不尽な理由で怒られた。

それ故に以降はどんなに帰りたくても帰らないようにしているわけなのだが、それでもそんなことは関係なくほほ遅刻をしてくる。

加えて、そのことを指摘すると

『な、何言つてんの？……えつと、その、待つのも駄の甲斐性つて
やつよ。甲斐性なし』

と、頬を今見ている空のよつて赤く染めながら皿を逸らすので
ある。

『じりに転んでも理不呂なことには変わりなかつた。

「……はあ

金べと言つてこそゞに溜息しか出でこない。

（……どじいたら、いいんだらう？）

そうは思つが、『じりよつもなこと』の血分が心の中に溜るものも
確かだつた。

「……うへん、でも、やつだなあ

空を見上げながらボソリと呟く。

このまま帰つたら理不尽な理由で怒りられるのは分かり切つたこと
であった。

きっと想像したよつて今見ている真つ赤な空のよつな顔で怒鳴り
散らしてくるのであらう。

「ハハツ、まつたぐ

本当に溜息しか出でこない、とやつ思つてツバキは苦笑をしながら
肩を竦めた。

（……まつたぐ、本当に）

本当に理不呂だ、とやつ思つ。

思えば昔から理不尽だったとそんなことを思い出す、本当にいつもいつも理不尽で理解不能なこと頗くめで驚いてばかりだった。だけど、そんな理不尽に対しても怒りだとか不満とかといった感情は全く浮かんでこなかった。

「うと、まあそこうといふこと、なんだうなあ

意味もなくウンウンと首肯をする。

今現在、呼び出したくせに待ちぼうけをくらわされているという状態を鑑みても『まつたく、あいづらしき』という安堵にも似た奇妙な納得感しか浮かんでこなかった。

これを『慣れ』というのだろう、とそんなことを思つ。だから、例えこのまま来なかつたとしても

『何か事情があつたんだろう、やういふこともある』

と自己完結して、まさか！何かの事件にでも巻き込まれたのでは！？とか冗談交じりに考えて『理不尽』に対して溜息を吐く方が何倍も良いとそんなことを思つた。このまま帰つて『理不尽』な理由で怒られるより何倍も馬鹿らしくて良こと。

「フツ、ケセラセラ……だつたかな？」

「あんた、何ブツブツ独り言を言つてゐの？」

鼻で軽く笑つてうる覚えの方言を弦じていると、不意に扉の方から声が掛けられた。

直後、金属質な音と共に扉が閉まる音が屋上に鳴り響く。

1時間以上も遅刻をしてようやく現れたようであった。

彼女はまるで危ないものでも見るかのような眼でじりじりを見ている。それは長時間の遅刻をしたとは思えないほどに理不尽で、思わず肩を竦めたくなるような、そんなひどい対応だった。

「ハハツ、まあ誰かさんが人を呼び出した割には来ないもんだから、暇だったんだよ」

苦笑をしながら寄りかかっていたフーンスから身体を離す。それまで危ないものでも見るかのような呆れた眼でじりじりを見て、いた彼女が少しうるたえるように身じろぎをした。

「うう、それはその……えっと、ま、待つのも男の甲斐性つてやつよー感謝しなさい」

頬を少し赤く染めて彼女は取り繕つよつに田んぼを横に逸らした、何故かは知らないが誇らしげに胸を張つてくる。

「……ハハツ」

その台詞も仕草も想像した通りで、何とも理不尽だと感じるが、なもので、ツバキはどこか安堵するかのような苦笑を洟らした。本当に何とも彼女らしいと思えるもので、とてもおかしくなった。彼女は屋上と屋内とを繋ぐ扉の前に立つていて、何故かその手には大きなビニールの買い物袋を抱えている。

どうやら人を呼び出しておきながら今まで買い物をしていたようであった。

理不尽だ、とそんな感想しか浮かんでこない。本当に彼女らしい。

『理不尽』だ、とそんな感想しか浮かんでこない。

(ホント……ヤレヤレって感じだよ)

そう思い、ツバキは田んぼを瞑つて安堵するかのよつて息を吐いた。

「ん? 何よ? その顔は?」

「へ?」

不機嫌そうに眉を顰めた彼女に見咎められる。

ツバキは意味が分からないと少しばかり呆然としたが、それを見て彼女は更に眉を顰めた。

「ふんっ! まつたく……あんたって、いつもそう。『僕には全部わかっていますよ、お嬢様』とでも言いたげな顔をして『

「えつ? いや、そんな顔はしないと……」

「してた! まつたく、しょうがないお嬢様だなあ、とかそんな顔だつた!」

即時の糾弾。

反論は許さないとでも言つよつた断定の口調だった。

(……うーん、そんなこといわれてもなあ)

氣まぎさに負けてボリボリと頬を搔く。

曰く

『僕には全部わかっていますよ、お嬢様』

という顔をしていたらしいが、

(『僕』とか『お嬢様』とか間違つても頭の中には出てこないんだけどなあ……)

そもそも一人称 자체あまり使わない『お嬢様』なんて間違つても使つたりしない、とツバキはそんなことを思いながら漫然と顔を

赤く染めている彼女を眺めた。

不満げに唇を尖らせ不機嫌さを態度で表わすかのように明後日の方向を向いている。

理不尽 そんな言葉が頭に浮かんでくる、帰つても帰らなくてどちらにしろ怒られることには変わりないようであつた。

今もチラチラと視線だけを向けながら、ブツブツと何かを呟いている。

（ふう、まつたく……）

彼女らしいと言えば彼女らしい、そう思つてツバキは当初思つていた通り『理不尽』に対しても暖かい溜息を吐いた。

やつぱり『慣れ』とこつやつなんだろう、とそんなことを思いながら。

「……む、

溜息を見て、彼女がまた眉を顰める。

「……何かイライラとする溜息ね……あたしのこと馬鹿にしてる?」

「えつ?いや、そんなことないって」

「ホントホント」

「ホントホント」

彼女の問いに対しても即座に頷いて肯定する。彼女は不満げに呻くが一応は納得してくれたようで渋々と引き下がつてくれた。

いい加減、話を先に進めたい。

そう思つての行動だつた。

チラリと空を見ると、太陽が落ちかかつており夜になりかけていた。

「……あ～、それでさ。何か用事があるんだよな？呼び出したんだから」

「うう、え、えっと……あ、当たり前じゃない！その、用件はあるある。そう、ある…」

何故か少しうるたえながら同じ言葉を何度も繰り返して、気恥ずかしそうにそっぽを向く。

その顔は周囲が夜の色に染まり始めているはずなのに、夕陽の色に染まっていた。

「……あの、その……『めん、ね？待たせちゃった、よね？』

「え？うん、まあ少なく見積もつても1時間以上は」

そっぽを向いたまま視線だけをじりじりと寄こしたまま投げかけられた問いに対しても直に答える。

（……あれ？2時間くらい、だったかな？）

返答をしてから少し考え込む、が今まで時間を確認してなかつたので正確にどれほどの時間を屋上で過ごしていたかは分からなかつた。

2時間と言われば2時間の気がする、3時間と言われば3時間のような気がする。

（まあ、いつか）

とりあえず1時間以上なには変わりないから嘘ではないだろう、とツバキは非常にアバウトなことを考えて血口元結した。

「……そつ、か。1時間以上、か」

「うん、まあそうだね」

「あ、はは」

力のない笑い。

その笑いは何か絶望的なものを叩きつけられたかのような、それでいて何か安堵するかのよつとも見える不思議な笑みだった。

（……妙だな）

どうにも落ち着かない気分に襲われて所在なきに頭を搔く。彼女は傍目から見ても明らかにほどに申し訳なさそうな顔をして、上目遣いでこちらを見つめてきた。

「うう、その、『ごめんね？ツバキ。……あの、あたしだって、悪いとは思ってるの。いつもいつも遅れちゃって……その、好き好んで遅れているわけじゃないんだけど……でも、いつも色々と迷っちゃって、今日も迷っちゃって、遅く、なっちゃって……ホントに、本当に、『ごめんね』

「……」

ツバキは何も言えなかつた。

それはとても弱々しい言葉だつた。

『ふざけるな』

なんて言葉は欠片も出でこないけれど、仮にそんなことを言つて拒絶してしまつたら全てが壊れてしまいそうなほどに弱々しくて……そんな言葉を口にする彼女も、今にも涙が零れ落ちそうなほど濡れた瞳をしていて、自分に許しを請うような怯えた態度をしていて、その姿はとても弱々しいと感じるものだつた。

その姿を、普段は絶対に見ないような彼女のそんな姿を見て

（……雨でも降るんじゃなかろうか？）

ツバキは天氣の心配をした。

身体の芯からゾクゾクと震えがあがつてくるのを感じる。彼女は動かない、上田遣いのままこちらを見つめている。おそらく何か言葉が掛けられるのを待つているのだろう。

「……」

「……」

静寂。

ツバキはそのまま空を見上げた。

「……ふむ」

「え？あの、ツバ、キ？」

控えめに声を掛けられるが、取り合わずにそのまま空を見る。太陽はもう地平線へと隠れる寸前で綺麗な三日月がぼんやりと浮かんでいた、周囲には雲が一つも見当たらず雨が降る気配もなかつた。

(……うーん、やけにしおらしいから変な感じがしたんだけどなあ)
降りそうにはないな、とそんなことを思いながらパリパリと所在なく頭を搔く。

いつも強気で『理不尽』なことをしてくる幼馴染の弱気なしおらしい姿、それは初めて見るものでとても不可解なものであった。いつも見る姿とはまるきり逆のもので、全くと言つていいほどに何も分からぬ。

だが、不可解で何も分からぬ」との中から一つだけツバキは理解をした。

(……迷つたから遅れた、か)

呆然と頭の中で彼女が口にした言葉の内容を反芻する。

彼女の謝罪 とても長くてたどたどしい口調で語られたそれは、本当に申し訳ないと心から思っていると実感出来るものだった。

申し訳ないと思つてゐるがゆえに長くてたどたどしいものであつたが、頭の中で整理して短く要約をすると

『遅れたのは故意ではない、迷つたから遅れた』

となる。

少なくともツバキはそんな風に要約をした。

(…… そなうのか、方向音痴だつたのか)

今まで全く知らなかつた、と心の中で呟く。

きつと目的地に到達するまで何処とも知れない道を彷徨つていたのだろう、まつたく分からぬ場所に出てしまつて、それでも頑張つて分かる道まで引き返したり地図を確認したりして最後まで諦めることなく頑張つて待ち合わせ場所まで来ていたのだろう。

そんな姿を想像してツバキは涙を流しそうになつた。

どんなに頑張つても変えることの出来ないもの、生まれながらにして持つ生来の気質だとか、そういうものがある。

(うん、無理なものは無理、そういうことつてあるんだよなあ)
きつとそなうのことなんだろう、とツバキはそんなことを思つた。

「えつと、ツバキ？ あの、何で田頭を押せえ……」

「大丈夫」

「え？」

「大丈夫、気にしてないよ。どんなに遅れても、どんなに待つことになつたとしても、絶対に待ち合わせ場所には来てくれた。それだ

けで十分だよ」

「ふえ？……えっと、ホン、ト？」

「うん」

一之口と満面の笑顔で、彼女に良く見えるよつこと大仰な仕草で首肯をする。

自分は今、人生の中で最も素直な気持ちで最高に優しい笑顔を浮かべている。そんな自覚があった。

「……そつか。フフフ、そつかそつか～」

ウンウンと目を瞑つて小刻みに頷く。
その顔はそれまでの弱々しいものから一転して、みるみる明るさを取り戻していった。

小さな笑みを零し、最後に景気づけるよつと一際大きく頷く。そして

「あははっ、うん～ツバキ、あんたつて本当に馬鹿ね～！」

本当に、本当に嬉しそうな太陽のよつな笑顔でそつ言つた。

「……ハハハ、そつかなあ？」

「うん～馬鹿、ホントにスッゴイ馬鹿～！」

「アハハ……」

思わず苦笑を洩らす。

理不尽だ、と頭の中ではそんなことを思つていた。

彼女は本当に嬉しそうな顔で『馬鹿』と連呼する。

少しばかり顔が引きつり溜息を吐きそうになるが、今は慈愛の方が勝つているため顔は最高に優しいと思える笑顔を保つていた。

このタイミングでどうして馬鹿という言葉が出てくるのかは理解出来ない、けれどそんな彼女らしい『理不尽』な姿に少しばかりツバキは安堵した。

今の彼女は何か心の中に抱えていた懸案事項から解き放たれたよう、そんなすがすがしい笑顔を浮かべている。

（きっと、自分の弱い部分を見せるのが怖かったんだろうなあ）自分が方向音痴で目的地に着くまで長時間かかってしまう、という事実を改めて打ち明けるのは怖かったのだろう。

自分から自分の弱い部分をさらけ出すことは簡単に出来る」とじやない、とそう思つてツバキは不可解だつた彼女の弱々しい姿に納得をした。

きっとこのことを言つたために今日は屋上に呼び出したのだろう、とそんなことを思つた。

それほどに彼女は晴れやかな笑顔を浮かべていた。

そんな彼女の笑顔を見て、一つ苦笑をするように肩を竦める。

ツバキも彼女がいつも遅刻をしてくる理由がハツキリして、今まで心中でモヤモヤとしていた部分がスッキリと無くなつた。

これからも遅刻をしてきたとしても気長に待つことにしよう、彼女もその方向音痴という点に悩み苦労をしながらも頑張つてゐるはずなのだから。

（うん、細かいことは気にしない）

一つの頷きと共に決心をし、未だに綺麗な笑顔を浮かべている彼女の方に向かつて歩き始める。

「それじゃ、そろそろ帰ろうか?」

「フフフフ……って、えつ？ 何？ 何か言つた？」

「いや、もう暗くなり始めてきたからそろそろ家に帰らないって？」

「えつ？」

言葉を聞いた瞬間に彼女がたじろいだ。

（あれ？ 用は終わつたんじゃないの？）

彼女の様子にツバキは少しばかり首を傾げる。

「……あ～、と、帰らないの？」

「だ、駄目っ！ その、まだこ、こ……つ、とにかく駄目っ！ まだ、え～と、そう！ 用はこれからなの！」

彼女が慌てるように顔を真っ赤に染め上げて否定をする。用件はまだ終わつていなかつたようであつた。

思わずパリパリと頭を搔く。

月は先ほどよりもハツキリと見えるようになり殆ど夜になりかかつていて。正直なところ早く家に帰りたい、というのが本音であつた。

頭をパリパリと搔きながら先を促す。

「え～と、それじゃ、その用事つて？」

「うつ……それは、その、えつと」

「……？」

ツバキは彼女の様子を見て、思わず首を傾げた。

顔を真っ赤に染め上げて、何かを躊躇つかのよつて手をモジモジと動かしている。

(その用事を済ませる為に呼び出したつてこの向でやいで止まるんだるつ~)

何か言いにくうことなのだらつか~と思考を巡らせながら何かを躊躇している彼女の姿を眺める。

あるいは今、彼女が告げよつとしてこむことは自分が方向音痴であると告白すること以上に打ち明けにくことなのだらつか~。彼女の姿を見てツバキはそんなことを思つた。

「……ふむ、言こにくことなら別に無理をして言つてくれなくてもいいよ~」

「え?」

果然と彼女がこちらへと顔を向ける。

その顔を、赤みが無くなつた真っ白な顔を見つめながら続きを口にする。

「何といふかや、そんなに言つ淀むつてはや、出来れば言つたくないことなんだり?だつたら……」

別に言つてくれなくても構わない、何も言わなかつたとしても何も変わらない。細かいことは気にしないからさ。

そう続けよつとした瞬間、何か絶望的なものを見たかのような色を無くした表情で彼女が慌てて声を荒げた。

「駄目つ~! それは、駄目~…… その、今日は頑張つて言おつて、
そう心に決めてきたから」

「えつと、やう、なの？」

「うん……確かに、言いだすのは凄く怖くて、そのままでも……まだ、このままでもいいかなって、そうも思つ……でも、凄く怖い、けど伝えたくないわけじゃない……変わりたくないわけじゃないの」

「……あ～、そう、なんだ」

「……うん」

「……」

「ククリと消え入りそうなほど小さな声で返事をする彼女を見ながら、思わず呆然と頭を搔く。

いつたん真っ白になつた彼女の顔は、言葉を紡いでいくにつれ紅潮していく。今では「これ以上にないと言えるほどに赤く染まつていた。

（……ふむ）

どうしよう、と心の中で少しばかり焦る。

ツバキには良く分からなかつた。何が分からぬのかといつと、そもそも全体的に良く分からなかつた。

当たり前だ。これから伝えようとしていること、今はまだ彼女の中にしかない言葉を前提に独白しているのだから、それを知らない自分が分かるはずがないじゃないか。と、そんな風に心の中で言い訳をする。

だから、今の言葉がどうこうことなのかは分からぬ。けれど、今彼女は心の準備が必要なほどに何か大切なことを伝えようと/or>いるということ。

それだけはツバキにも分かつた。

「……うん、分かつた。いや、何を言おうとしているのかは全然分

かんないんだけど、とりあえず良くな分かつた

「え?……えっと、その、どういへ、」と?」

控えめに、途切れ途切れに言葉を発しながら彼女が呆然と呟く。
その瞳は何かに怯えるように揺れていた。

その瞳を、その不安げな瞳を見つめながら言葉を続ける。

「大丈夫、何を言おうとしているのかは分からない……分からない
けどや、何を言つたとしても絶対に笑つたりしないし、馬鹿なこと
を言つて茶化したりもしない。しつかりと言葉を受け止めるよ」

だつて、その言葉は君にとつて大切なことだと思つから。
そう心の中で続きを呟いて、ツバキは静かに頷いた。

「…………その…………ホン、ト?」

「ああ、ホントだよ、本当。ホントに本当」

「…………そう、分かつた」

ポツリと、消え入りそうなほど小さな声で呟いて彼女も静かに頷
いた。

それはつい先ほど耳にした小さな声よりも更に小さな声で、本当
に今まで聞いたことが無いような小さく細い女の子の声だつた。
その言葉と同時に、それまで不安げに揺れていた瞳が安心を取り
戻したかのように輝きを取り戻す。

彼女は何かを決心するように一度目を瞑つてから改めてこちらへ
と瞳を向けた。

「それじゃ、今から、いつから……あたしの気持ちを、ずっとずっと
と前から伝えたかったことをいつから……最後まで、うやんと聞い
てて、ね？」

「……」

ウン、と無言で頷きを返す。

元からやのつもりだつた。

もはや言葉は要らない、最後まで口を挟まずに彼女の言葉を受け
取ろうとやう思つ。彼女は買い物袋を持ったまま胸の前で手を組んで、深く息を吸つ
ては吐いてを繰り返していた。

一時の静寂。

彼女の息づかいだけが聴こえる静かな世界だつた。

まるで音だけを切り取つたのではないかと思えるほどに他の音は
何も聞こえてこなかつた、ただ月の光と落ちる寸前の太陽だけが全
てを照らしている。

そして、そんな幻想的とも思える光景の中で彼女は意を決するよ
うに口を見開いた。

「……あの、ね。あたし、小さな頃からツバキにずっと伝えたか
たことが、あるの」

たどたどしく吹けば消えてしまつよつな弱々しい声で言葉が紡が
れていく。

その言葉は段々と尻すぼみになつていき、それと同時に彼女の顔
は段々と赤みを増していった。

身体は強張り、フルフルと小刻みに揺れていいく。

「あ、あの、ね。あたし、小さな頃からずっと、ずっと、と……」

「……」

彼女の身体がガクガクと一瞬前よりも確実に強さを増して大きく揺れる。

硬く閉じられた瞳の端には涙が溜まっていた。

「……ひ、ずつ、と、あんたのことが、ツバキの、ことが、す、す
き」

「……」

言葉を紡ぐにつれ身体に込められた力がどんどんと強くなつき、ついに瞳の端に溜まっていた涙が頬を伝つて零れ落ちた。

それを皮切りにこれ以上は無いというほどに真っ赤な彼女の顔が更に紅潮していく。

そして、

「つーーす、すき焼きみたいに見えてたのーー」

限界を超えた彼女がそう叫んだ。

「……」

「これはどう反応すればいいんだろ? つーとツバキはそう思つて呆然とした。

「……えー、と」

「つーな、何ー? まさか告白でもすると思つた? フンッ! つ、うう、

か、勘違いしないでよねっ！」

パイツと何故か泣きそうな顔で彼女がそっぽを向く。

（いや、そんなことは思ってなかつたけど）

と、ツバキはそんな風に思つが口には出せない。言つてもやいやいことになるだけだといつとがツバキには分かり切つていた。

「……あ～、その」

「うー」

言葉に反応してビクツと肩を揺りす。

ツバキは心の中で焦つた。

本当に、まつたくとこつていいいほひ向を言えぱいのが分からな

い。
何かを言わなければいけないと、そつは思つただが言葉が一向に出てこなかつた。

すき焼きみたいと言われても、どう返せばいいのか分からない。

そんな風に言い淀んでいると彼女がガサガサと手に持つ買い物袋を漁りながら足早に近づいてきた。

「フンツーあんた、頭に糖分が足りてないんじゃないの？だから、そんな……そんな恥ずかしい勘違いをしちゃうのよー。」

「いや、そんな勘違いはしてないナビ」

「黙れっ、口！」たえするな～っ！

「はー……」

勢いに負けて、半ば反射的に返事をしてしまつ。

このあたりに『慣れ』といつものが表れているよつた気がしてツバキは少しばかり悲しくなつた。

「フンッ！ 糖分よ、糖分。あなたの頭に糖分が足りてないのが全部悪いのよ！」

「いや、何かもう意味が分からな」

「うるせー！ 口を挟むなっ！」

「はい……」

再び、反射的に肯定を返す。

そして彼女は慣れきってしまった」からの反応へは、もぐれず、ガサガサと漁っていた買い物袋の中からバナナを取り出した。

「ファンツ！ それもこれも糖分が足りてないのが悪いのよつー。そう、だから、その、これでも食べて糖分を補給しなさい！」

叫ぶなりグイッとバナナを押しつけられる。

- 7 -

ツバキは無言でバナナを受け取った。

もはや何かを言う気は欠片も起きた
何とはなしにバナナを一つだけ房からもぎ取る。そうして房に残

るバナナは残り7個となる。

とりあえず1本だけで十分だから残りは返したい、とそう思つが彼女はこちらを確認することもなく屋内へと繋がる扉へと歩き出しそうな顔つきで立っている。

ていた。

(全部食えと、やつはつんだらつか?)

出来れば勘弁してほしい、とツバキは両の手に持つバナナを眺めて呆然とした。

理不尽だ、とそんな言葉が頭を駆け巡る。

糖分が足りないとバナナを押しつけて、1人だけ残して先に帰ろうとする彼女の姿は本当に『理不尽』で、理解不能なこと極くめで(……ふう、ホント、やれやれって感じだよ)

そう思つてツバキは安堵するかのように苦笑を洩らした。

本当に彼女らしく、そう思つ。本当に彼女らしく『理不尽』な姿だと、そう思つてツバキは安堵した。

ギイと金属的な音が鳴り響く。

彼女は既に扉の前に立つていて、こちらを見つめていた。

「ツバキ! 今日のことは、その、何でもないんだからね! もう、全部わかつちゃつてゐかもしけないけれど、その、本当に何でもないんだからね!」

「あへ、うん、はいはい」

「フンッ! 何よ! その適当な返事は! うう、あなたのことはなんか、本当に何とも思つてないんだからね!」

ガタン! と扉が乱暴に叩きつけられる音が鳴り響く。

その音を最後に、捨て台詞のように叫んだ彼女は屋上から姿を消した。

それまでどこか暖かな雰囲気が流れていた空間に閑散とした風が吹き抜け、一挙に空虚な空間へと変わる。

ツバキはそんな独りつきの空間で一つ息を吐いた。

(勘違いしないでね、と言わてもなあ)

呆然と半ば反射的にバナナを持った手で頭を搔く。

ツバキには言葉の半分以上も理解することが出来なかつた。

『勘違いしないでね』

そう彼女は言つていたが一体どこに勘違いをするよつた要素があつたのだろうか?と首を傾げる。

話を聞いていた限りでは何処にも勘違いするよつた場所などは無かつた気がした。

「うーん……うん! 良く分からないな!」

「クリと勢いよく頷いて、頭の中で解決できない問題に見切りをつける。

少なくとも自分は何一つ勘違いなどしていないのでから何も問題は無いだろう、とそう思つてツバキも屋内に繋がつてゐる扉の方へと歩き出した。

彼女が来る前まではしっかりと辺りを照らした太陽は地平線へと沈み、今では月が爛々とした輝きを放つて辺りを照らしてゐた。今が時間にして何時になるのかは分からぬ、けれど今日はもう家に帰ろう。

そう思いツバキは扉に手をかけた。

瞬間、その場所で最後に彼女が叫んだ言葉が頭に反響する。

『あんたのことなんか、本当に何とも思つてないんだからね!』
と彼女はそう言つた、それはもう真つ赤な顔で力いっぱい叫んでいた。

「……ふつ

それを思い出して、思わず軽く笑つてしまつ。

(うん、大丈夫。何も、勘違いなんかしてないさ)

心の中で先に屋上を後にした彼女へと話しかけるよつて啖いて、

扉を開ける。

彼女は本当に自分のことなんか、篠崎ツバキのことなんか何とも思っていないということ。それをツバキはしっかりと知っていた、随分と前に自分の居ない場所で友人と思しき人達に必死な様子で叫んでいたのを聞いていた。

（……でも、だからどうしたって、そんな話だよな）

（そう関係ないと、自分のことをどう思つていようと関係ないとそう思う。）

何故なら彼女がどう思つていようと自分は彼女のことを大切だと、そう心の底から思うから。

（そう、自分の心は変わらないから）

フツとどこか自分を馬鹿にするような笑みを浮かべて、ツバキは背後で扉が閉まる金属的な音を耳にした。

1 旗折師（後書き）

『 テレたあとにシンがくる……シン『テレ』ではなく『テレシン』、最後に
突っぱねられるから救いが無い』といつ……『 懇傷様です、名前も出
てないけどこれで出番は殆ど終わりだよ。やつたね！
とか思つたりしていました（笑）

2 魔女（前書き）

ここから一気に超展開になります。
文章も少なめですが、読んで頂けたら幸いです。
それではどうぞ。

部屋

どことも知れない小さく奇妙な部屋の中、窓も出入り口も存在しない本当に奇妙な部屋の中。

おおよそ人の生活感とは無縁で、魔女は笑っていた。

「ふ、ふふ、あははははははは！ふつ、くくつ、何て馬鹿なのか
しら？この子、くくつ、本当に面白いわ」

視線が向けられているのは大きな水晶球、そこに映る篠崎ツバキの姿を見て魔女は本当に愉快そうに笑っていた。

人間では有り得ないと思われる長い瑠璃色の髪を揺らしながら、妖しいと表することが正しいと思えるほどの異常に整った顔を喜色満面に染めて少女のように笑っていた。

「ふふつ、本当にいつもいつも面白いわ。くくつ、あんなに、あそこまであからさまで馬鹿にしたくなるほどなのに欠片も気付かないで全く別のことを考えるなんて、くくつ、本当に可愛い子ね」

クスツ、と上品に笑つて水晶球へと映るツバキを愛おしげに眺める。

魔女としてはツバキに想いを寄せる幼馴染という存在は少し気に入らない部分もあるが、それを全く理解していない、片鱗すら掴んでいないツバキの珍妙な応答はそんな気に入らない部分を補つて余りあるほどに愉快で心地良い反応であつた。

「くくつ、傍から見たら丸分かりなのに、ねえ？ふふつ、救われな

いわねえ、本当に思わず馬鹿にしたくなつちやうへりこに、ね

実際、心の中では馬鹿にしていたけれど。

と、胸の内で続けて魔女はニヤリと冷たい笑みを浮かべた。
まさか本当に欠片も理解されていないと、言葉を途中で変更し
た臆病者も夢にも思つていなかつたであらう。

「ふふつ、まあ私にも想像つかなかつたけれど、ね。ふふつ、本当に私が想像をつかないことをするのが上手ね、可愛くて愛しいツバキくん」

一ヶコリと、ついやつき浮かべた笑顔とは真逆のやわらかな笑みを浮かべて魔女は水晶球に映るツバキを細くしなやかな指で撫でた。彼を眺めているだけで『退屈』が『楽しい』に変わつていく、彼を眺めているだけで幸せが胸を満たしてくれる。

もはや魔女にとつてツバキを眺めることだけが生活の全てとなつていた。

本当に、本当にあのとき退屈凌ぎの為だけにたつた一人の人間に繋げてみて良かつたと思える。

それは單なる偶然、だけもそれが全ての始まりだつた。

「ふふ、大好きよ、ツバキくん」

脳を惚けさせるような甘つたるい声で、水晶球に映るツバキへと話しかける。

無論、返事なんてものはなかつた。

それは当然のこと。一方的にこちらが見ているだけで干渉などは出来ない壁を一つ隔てた向こう側、声を届けることなど叶わないのだから。

自分は今、世界の理から外れた時の狭間とでもいうべき場所に独

りでいるのだから。

触れたくても触れられない、声を届けたくとも届けられない。そのことを少しばかりもどかしく感じる。

彼を囲う為の箱庭は、世界はもう出来ている。でも、何も出来ない、このままでは魔女には何も出来なかつた。

「ふう、早く死んでくれないかなあ、ツバキくん」

ポツリと呟いて、魔女は愛しいものを見つめる。

水晶球に映る彼の姿は脳天氣で何処までも馬鹿みたいで、ちょっとやそつとでは死にそうな気配は全くなかった。

当たり前である、人間が日常生活をただ送るだけで死の危険なんものは皆無に等しいなどということは魔女も理解している。

でも、死んでくれないと困るというのも事実であった。

とはいえ本当のところでは実際に死んでもらわなければならぬ、というわけでも無かつたりする。

死に直面する、あるいは死に瀕する。その時なら世界との繋がりが揺らぎ、こちらへと引き込むことが可能。

後は箱庭である『世界』へと放り込むだけ。それだけなのだが、そのタイミングは一向に訪れるような気配はなかつた。

「ふふつ、まあ構わないけれどね。私はどれだけでも待つもの」

そう、最悪で天寿を全うするまで待つことになつたとしても、そのタイミングで引きずりこめば良いだけなのだから。

そして、チョイチョイと身体を弄つて肉体年齢と場合によつては精神年齢も戻してやるだけである。

それはどこまでも自分本位で自分勝手なエゴイズム。けれども、そんな自分のエゴイズムでツバキを染め上げることも魔女にはひどく甘美なものに思えて少しばかり頬を上気させた。

「ふ、ふふ、ふふふふふふ」

昂揚する心の赴くままに可憐な唇の隙間から笑いを零していく。

「大好きよ、ふふふふ、本当に心の底から大好きよ。愛しい愛しいツバキくん、これからも私をもつともつと楽しませてね」

ニッコリと恋焦がれる少女のような満面の笑顔を浮かべて、水晶球に映るツバキの姿に口づけをする。

それからはツルツルとした水晶の感触しか伝わってこないが、今はそれで十分だった。

突発的な要因であるにせよ、天寿を全うするにせよ人間の生はいつか終わりを迎える。

待つ時間はもしかしたら一瞬かもしれない、あるいは80年以上になるかもしれない、もしくはもう少し短いかもしれない。だが、どれであるにせよ魔女には問題なかつた。

もはや時の流れから外れた今の場所で悠久の時を過ごしているのである、あと少し待つくらい魔女には何でも無かつた。

3 應者（前書き）

とある公園のベンチ。

学校からは5分とかからず、家へと帰る道の途中にある公園のベンチでツバキは月を眺めていた。

視界に映る空はまだ明るい、太陽の姿はもつゞいにも見えないが何処か建物に隠れた場所には居るみたいで空はまだ夜になりきれていない明るさを保っていた。

そのまま何の感慨も抱かずに、空に浮かんでいる不完全な三日月を胡乱げな瞳で見つめる。

月を見ても別に何とも思わない、それは特に意味のある行動ではなかつた。

ただ心中でモヤモヤとしている不完全燃焼な気分がそいつた行動へと駆り立てているという、ただそれだけ。ツバキには分からぬことだらけだった。

「……なんだかなあ」

ポツリと呟いて、彼女が屋上で語っていたことに對して思考を巡らす。

それはとても長い言葉で、たどたどしくて、どれもが彼女の確かな偽りの無い想いが込められていると感じじる「ことのできるものだつた。

そんな言葉を聞いて、どこかホッとしているような……そんな自分が心のどこかに居るのを感じる。

彼女の想い、彼女の心、そういうものを聞くことが出来て良かつたと。

けれど、よくよく思い返してみると屋上で語られた言葉の中で自分が理解をしてこととはたつたの一つだけだった。

『方向音痴』

そんな4文字の言葉だけ。

それは彼女が語った言葉の前半部分で、後半部分に至っては何一つ理解することが出来なかつた。

彼女の言つていた言葉が、屋上で必死な様子で叫んでいた言葉が頭の中で反響する。

「すき焼きみたい、か」

ポツリと呟いて、呆然とする。
彼女は確かにそう言つていた。

『すき焼きみたいに見えてたの……』

と、そう呟んでいた。

正直なところ、どういうことなのか欠片も分からぬ。
すき焼きみたいだと言われてもどう反応をすればいいのか分からぬ、と少し前にも屋上でそんなことを思つていたけれど時間が経つても分からぬことはやつぱり分からぬままだつた。

(これつて、褒め言葉なのかな?)

そう思い首を傾げてみる。だが、仮に褒め言葉だったとして何に對して喜べばいいのか果てしなく疑問であつた。

(……色々な材料が入つていて、面白い……か?)

思考を巡らして、フムと一つ頷く。

やはり意味が分からなかつた。

「はあ、さつぱりだな」

何も分からない、と溜息を吐いて苦笑する。

いくら考えても答えなんてものは一つも出でこなかつた。

分からぬものは分からぬ、答えはきっと彼女の心の中にだけあつて、それは他人がどんなに考えても答えには辿りつけない。だつて、本人じやないから。

と、そんなことを思う。

そんなことを思つて、ツバキはまたボーッとした。

そう考へると

（小さい頃に出会つてから今まで、長い時間を一緒に過ごしてきたけど……）

もしかしたら自分は彼女のことを何一つ分かつていなかもしれない、そう思つてツバキは少しボーッとした。

「……ハツ」

何故だか無性におかしくなつて、少し笑つてしまつ。

自分がとんでもなく馬鹿な人間に思えて、ツバキはそんな馬鹿な自分を思い切り馬鹿にしたくなつた。

「だから、頭に糖分が足りてないとか、そんなことを言われちゃうのかもしれないな」

ハハツと苦笑しながら呟いて、ツバキは手に持つバナナを見つめた。

それは彼女が帰り際に押し付けてきたもので、チラリと横にも目を向けると今も自分が座つているベンチの上にバナナが7本も残つている房が見える。

ツバキにはこれもよく分からなかつた。

（まるまる全部渡すかな、普通）

そう思つて、何とはなしにバナナをくるくると手で弄ぶ。

バナナは買い物袋に入っていたのである。それは彼女にとつて必要だから買ったという、そういうことのはずなのにどうして全部渡してきたのだろうか？とツバキはそう思つて首を傾げた。

「……まあ、別にいいけどれ」

バナナは嫌いじゃないし、と心の中で続けて思考を放棄する。まるまる全部押し付けてきた理由は全くと言つていいくほど分からなかつたが、別にそれで不都合が生じるわけでもないのでツバキとしては別にどうでもよかつた。

ベリッと皮を剥いてバナナを口に運ぶ。

その瞬間、バナナの柔らかな感触と甘い香りが口腔内を満たしていくを感じる。その感覚は空腹を訴え始めてくる身体には至福のよつにも感じられた。

（でも……）

チラリとバナナを咀嚼しながら、横を見る。

房にはバナナがまだ7本も残つていて、ツバキは少しばかりげんなりした。

「流石に、1本で十分だよなあ」

ふう、と鼻から少し甘い息を吐いてバナナを再び齧る。

腹は空いているが流石にバナナを8本も食べる気にはなれなかつた。

（家に帰れば、夕飯だつてあるはずだし残りは持つて帰るか）

そう思い、「クンとバナナを飲み込む。

口の中は甘い感触で満たされていた。

その点を考えても、やはり8本も食べることは出来ないと、そう思つ。

バナナを片手に持つて帰る姿を想像すると酷く滑稽に思えたが、正直なところ早く何かを飲んで甘い感触を拭拭したいと思うので特に何とも思わなかつた。

パクリと最後の一口を放り込んで立ち上がる。

空を見上げると三日月が爛々と輝いていて、不完全な夜は完全な夜になつていた。

（流石に、少し遅くなつちまつたかな）

パリパリと頬を搔いて、ベンチの上に鎮座しているバナナの房を持ち上げる。

少しばかり公園で時間を潰し過ぎたようであった。

（早く帰るかなあ、それで帰つたら……帰つたら、どうしよう…）

とりあえず飲み物かな、とボンヤリと首を傾げる。

彼女は糖分がどうのと屋上で言つていたが、糖分を補給したところで頭の回転が速くなつたような気は欠片もしなかつた。

「まあ、とりあえず家に帰るか。叔母さんもいるだろ？」

帰つてからることは帰つてから考えよう、とツバキは場当たり的なことを考えて自ら完結した。

左手にバナナの房を持って、右手でバナナの皮をプラプラさせて歩き出す。

特にやることは思い浮かばない。けれど家に帰つて何かをして、布団で寝て、それから朝起きて何故か家の前で待つてゐる彼女にはよつて言つて学校へ行く。

きつとそんなことを繰り返すのだろう。そついた何の変わり映えもない日常が何の変化もなく、この先も続いていくのだろう。

ツバキはそう思つて、何だか暖かい気持ちになつた。

こんな日常がずっと、いつかサイクルが変わるものだとしても、それでもずっと本質は変わらずに続いていく。

それはもしかしたら退屈だと、まるでルーチンワークのようだと

そんな風に感じることもあるかもしれないが、そんな変わり映えのしない毎日が続していくことを想像するととても暖かい気持ちになった。

(つて、何を考えているんだろうな)

ハハツ、と何だか照れくさくなつて苦笑をする。

さつきから随分と恥ずかしいことばかり考えているな、とツバキはそんな自覚をした。

「日常つて、そんな簡単には変わらないから日常つて言つんだよなあ」

ハハツ、と苦笑をしながら肩をすくめる。

まるで馬鹿みたいだ、とそんな風に思えてツバキは思わず頬を搔こうとした。が、手に持つバナナの皮が頬に貼り付いて少し微妙な気分になつた。

ベタリ、と皮の内側が触れて不快な感触がする。

「……とりあえず、捨てるか」

そう呟いて、ツバキは微妙な表情をした。

夜風がバナナの皮で少し湿つた頬を吹き抜けて、その部分だけが他とは違う感覚がする。

そのことにもツバキは微妙な顔をして、キヨロキヨロと「ミニ箱を探した。

月明かりだけが照らす薄暗い公園の中で頭を巡らす。

「え~と、「ミニ箱、ミニ箱……おつ、あつあつた

探してみると「ゴミ箱は意外とすぐ近くにあった。

公園の出口に向かう途中で、「ミニ袋だけが無造作に突っ込んであ

る空っぽの「ゴミ箱」が今から通る道の途中に置いてある。別に探す必要のある場所に置いてあるわけではなかった。

「……あほくや」

少し虚しい気分になりながら出口へ向かつて歩きだす。ツバキは自らの行動一つ一つが馬鹿みたいに思えて、少し悲しくなつた。

（まあ、それはそれで『らしさ』って、そう思ひなごね）そんな風に思えてしまつのも少し悲しかつた。

テクテクと、アホなことを考えたまま「ゴミ箱」を通り過ぎていく。そのまま2メートル、3メートルと遠ざかつていつて出口付近でバナナの皮を後ろに向かつて投げた。

これで「ゴミ箱」に入れることが出来たら少しは爽やかな気分になるだろう、とそんなことを思つて。

「……入つたかな？」

チラリと後ろを向いて確認をする。

そうするとバナナの皮が「ゴミ箱」の30センチほど前に落ちているのが瞳に映つて、ツバキはやつぱり微妙な気分になつた。

（まあ、そんなうまいくさいよね）

バリバリと皮を投げて自由になつた右手で頭を搔いて「ゴミ箱」の方へと向かう。

『投げたゴミに使われる』

まさにそんな状況だつた。

（結局、アホくさいまんまだな）

少し自嘲するように肩を竦めてから、道に落ちているバナナの皮を拾うために膝を曲げる。

無理に気取らない方がいいのかもしね、とやつぱり少しアホ

くさいと思ふことを考へながらツバキはバナナの皮に手を伸ばした。刹那、後ろからドタバタと騒々しい音が聞こえた。真横、それも自分にすれすれなほど近い位置を黒い影が通り過ぎる。

その影は何か鞆のようなものを持って走り過ぎていく、その姿だけがツバキには確認できた。

「……？」今の

何だつたんだろう？

卷之三

待ちやがれ!! 私のハッケを返せ!! このひーたく……

「^?」

「うーーーで、あの奴の件で、どうしてこんなことにな
ったんだ？」

「え？」

ツバキは瞬間に後ろを確認しようとして、それが出来なかつた。

アハッ、精神的衝撃を感じて前立腺のめぐら

そして、ツバキはぐはぐと血分が今井の手に捨おいた。ナナの皮を踏んだ。

二〇一

「悪い！今は構つてゐる暇が無いつ！バッグを取り返したら埋め合
つたするから！」

わせするからー。」

と、薄い白のワンピースを着たポーテールの女性が叫んで横を通り過ぎていくのを田にする。

だが、ツバキは今そんなことはどうでもよかつた。バランスが保てない。

慌てて手をバタバタと振つて、どうにかバランスを取りつとしたが体勢を立て直すことが出来なかつた。

ゆらり、と全ての景色が横倒しになつていく。

ツバキはその瞬間をやけにスローに感じた。

（つ、このまま、倒れこむと……）

後頭部を縁石にぶつけることとなる。

と、ツバキにはこの先に起きることを想像することが出来て、それが非常にまずいことだといつのは分かつたがもうどうすることも出来なかつた。

足なんかとついて地面を離れていて、体勢を立て直すことなんか既に不可能な状況だつたから。

今、その瞬間の中でこんなにも思考を重ねることが出来てみると、いうのも不思議だつた。

仮にこのまま後頭部を打ちつけて、打ちどころが悪かつた場合（……死因、自分が捨てたバナナの皮で滑つて頭部を強打か？）

何てバカバカしいんだろう、とそう思つて少し微妙な気分になる。やっぱリアホクさい、と苦笑いを浮かべようとして、その瞬間、後頭部に激しい衝撃が走り篠崎 ツバキの世界は暗転した。

3・愚者（後書き）

主人公が考えているだけ、というそんな内容だったりしました（汗
自分は彼女のことを何一つ分かつていなかつたのかもしれない……う
ん、そのとおりだね！
と、そんなことを言いたくなつていきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7526y/>

クレセント・ハート 三日月のクレハ

2011年11月26日22時55分発行